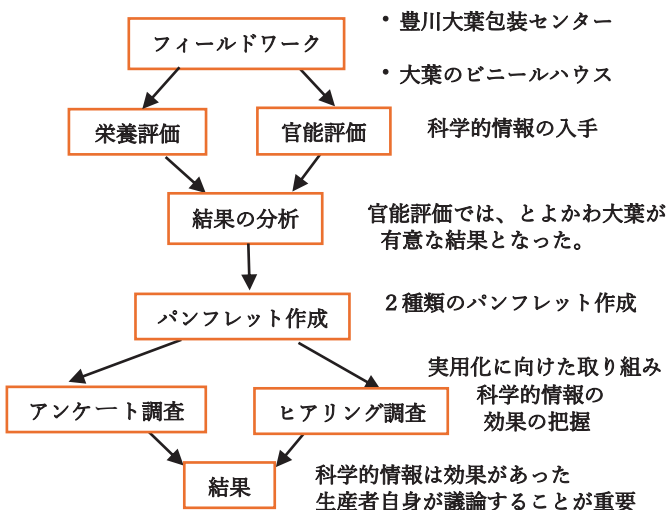


とよかわ大葉の栄養・官能評価とその科学的情報を用いた地域農産物のプロモーションの効果について
愛知大学地域政策学部地域政策学科
食農環境コース4年 後藤俊太

1. はじめに

豊川市産の大葉は、他の産地の大葉と比較し、歯ごたえがあるものの葉が柔らかく、さわやかな香りがある。しかし、保存性の悪さから大量に廃棄されているという現状がある。とよかわ大葉のプロモーション（以下、PR）を行うためにはこの優位性を如何に消費者に伝えるかが重要となる。本研究では地域農産物の客観的な栄養評価や官能評価による科学的情報が地域農産物のPRにどのような効果があるかを明らかにすることを目的とした。研究の流れを図1に示す。本研究では実用化に資する結果を導くことを目標としたため、科学的情報の評価段階だけでなく、消費者アンケート調査や生産者ヒアリング調査を生産者団体と議論しながら、実態を踏まえた研究を行った。



【図1】研究の流れについて

2. 科学的情報の検査

2-1. 栄養評価の実施

栄養評価は(一社)日本食品分析センターと(株)食機能探査研究所にとよかわ大葉3種類の分析を委託した。調査項目は、大葉の主要な栄養素であるカルシウム、カリウム、β-カロテン、ビタミンB1、ビタミンB2、葉酸、ロスマリン酸である。結果は大葉主要の栄養素、ロスマリン酸を含めて食品成分表にある大葉の栄養素と比較し、大きな変化は現れなかった。

2-2. 官能評価の実施

官能評価とは、人の五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)に頼って物の特性や人の感覚そのものを測定する方法をいう。評価は対象学生19~22歳の30名で行った。調査品種は、とよかわ大葉3種類と市販の大葉である。結果は、JA愛経1号が他の3種類の大葉を有意に上回る結果となった。東三温室愛経1号の味の良さのみ、JA愛経1号を上回った。それ以外(外観・香り・味の良さ、総合評価)においては、

JA愛経1号がすべて上回った。番ら(2018)の調査では市販の大葉と愛経1号を比較して差が見られなかったが、本研究における官能評価と加藤ら(2006)の調査を比較して、愛経1号が同等に有意な結果となった。

3. 科学的情報を用いた調査の実施

3-1. アンケート調査

科学的情報の価値を調査するために、次の2種類の情報提供を行うアンケート調査を実施した。①官能評価のみ、②官能評価と大葉の栄養素や保存方法、とよかわ大葉の情報である。各30名に小売店前での店頭面接調査を行い、最初に大葉の定価は10枚入り、100円程度と示した後、情報提供前後に買いたい値段を聞いた。結果を表1に示す。市販の大葉より、とよかわ大葉の方が評価額は高くなった。市販の大葉と比べた香りの良さ、味の良さを数値に対して約30円分の情報の価値があることが示された。さらに、大葉の栄養・健康情報については約5円の情報の価値があることが示された。

【表1】アンケート結果のまとめ

	事前評価 (円)	市販の大葉(円)			とよかわ大葉(円)		
		平均	最小	最大	平均	最小	最大
①	9.8	9.3	5.8	15.0	13.2	6.8	25.0
②	9.1	9.5	7.0	15.0	12.1	9.0	21.0

3-2. ヒアリング調査

東三温室園芸農業協同組合の職員の方に官能評価の結果をどのように思うか、うかがったところ、「香りや味わいの結果は品種改良や品質栽培面の向上に大いに参考にした。」また、消費者にどのように伝えたいかという質問には、「消費者よりも、生産者に伝え、さらなる意欲や誇りを持ってもらいたい。」と回答を得た。

4. まとめ

本研究では、フィールドワークで設定した問題設定の下、栄養・官能評価を実施し、その科学的情報のとよかわ大葉のPRへの効果を調査した。とよかわ大葉が栄養評価では他地域産の大葉と差が出なかったが、官能評価では有意に上回る結果となった。栄養・官能評価という科学的情報を用いることで、消費者の大葉に対する価値が上がるのがアンケート調査で示された。ヒアリング調査の結果から、官能評価の情報を生産者に伝えることで、生産意欲や誇りを持ってもらうことが可能となることがわかった。栄養・官能情報をどのように伝えるべきか、何の情報と共に、どの場所で、どの世代に伝えることが大切であるか、生産者自身が改めて議論し、消費者に情報提供を行うことで、第三者が提供するよりも根本的なPRに繋がっていくと考える。

【参考文献】

- ・加藤政司・間間さおり・穴井尚子・榊原政弘・浅野義行・大藪哲也, "低温期の栽培に適するアオジソ新品種「愛経3号」(仮称)の開発," 愛知県農業総合試験場研究報告 50,2018,11-17.
- ・番喜宏・矢部知則・菅原眞治, "斑点病抵抗性アオジソ新品種「愛経1号」(仮称)の育成," 愛知県農業総合試験場研究報告 38,2006: 39-44